サロン

風　　水

今年は平安建都1200年ということで，京都に関する記事や番組が多い。先日も，NHKの番組で京都の町作りに関しての特集を行っていた。この中では「風水」（ふうすい）による視点からの解説が作家の荒俣宏によりなされていた。また，別の雑誌でも，今世紀末の中国への返還を控えた香港で，中国系とイギリス系の銀行の巨大建築が風水の考え方により建設されたとの記事があった。

風水とは，大地のエネルギーをいかに上手くコントロールし活用していくかを考える学問であり，約千年前に中国で一般的になった考え方である。これに対して，「気功」（きこう）は，人体に作用する生命エネルギーの気をいかに上手くコントロールしていくかを習得するものである。すなわち，風水は大地のための気功なのである。この様な考え方を，西欧人は自然と人間との穏やかな付き合い方を考える学問として理解し，エコロジーの考え方に近いと考えているそうである。

風水には，生きている人間の住む環境を対象にした陽宅風水と，死者の住む家（墓）を扱う陰宅風水の二種類がある。陽宅風水には，山の形と水の流れを基準として土地の吉凶を判断し国や都市づくりに活用されたラージスケールの風水と，個人の成年月日や干支までを加味し個人の住居やビルに吉を呼び込む方法を判断するスモールスケールの風水の二種類がある。昔の都が置かれた場所を風水の考え方で注意深く分析すると都市づくりに風水が活用されたことは確かなようである。スモールスケールの風水については東南アジアを中心として現世的なテクノロジーとしての磨きをかけて益々盛んといったところである。

ちなみに，風水で北海道の代表的な都市である札幌市と函館市を見ると，五稜郭を備えた函館は自然の地相から見ると理想的な都市であるのに対して，札幌は地相的には東側に関心を向けなかったバランスを欠いた都市である。しかし，これを救い札幌を大都市としているのは千歳空港のエネルギーであると風水では解釈する。このように，風水は人工的な工事を施すことで改善することが出来るとする点で面白い。すなわち，風水は自然と人工のからみあいにより変化するのである。

自然に人工的な手を加え人間にとって暮らしやすい環境を作りだしていく風水の考え方は，土木に通じるものがある。さらに，自然と人間との穏やかな付き合い方までを念頭に置いていたとすれば，風水は環境問題までも取り込んだ総合的な工学であったのかもしれない。西洋的な研究の姿勢すなわち分化の思想からすると胡散臭くも思えるが，自然との関係を総合的かつダイナミックに考えていく姿勢は大変参考になると思われる。さすが，中国人の知の技法の奥は深い。

この開発土木研究所月報も今年度中に五百号となる。この種の雑誌でこんなに長期にわたり発行されていることは大変なことであり，先達の努力に敬服する次第である。五百号になるに当たり，これまで行われてきた研究の総合化と研究の今日的意味の再評価を行っては如何か。

（記　本田幸一）